

学生災害ボランティアに参加した福島県立医大生へのインタビュー

学生災害ボランティア活動報告会では、福島県立医科大学の学生のみなさんがどのようにボランティア活動に取り組み、何を感じ、考えたのか、また、さまざまな問題点や課題を抱えていたということもわかりました。活動を通して見えた問題点や課題に対して解決策や要望などをどのように考えているのか、さらに、活動を通して学んだことなど、福島県立医科大学にてお話を伺いました。

学生災害ボランティア活動に参加した学生のうち7名に集まっていただき、座談会形式で話し合っていました。

今回集まっていた学生のみなさん

医学部6年 垣野内 景くん
医学部6年 豊田 喜弘くん
医学部5年 齋藤 伴樹くん
医学部5年 植田 牧子さん
医学部4年 荒井 勇人くん
医学部4年 鈴木 美香さん
医学部2年 高岡 沙知さん



活動を通して感じた問題点に対する解決策や要望について

情報の集約と分配

記者：災害ボランティア報告会では、情報の錯綜や情報不足によって、実情が把握できない、行動計画も立てにくかったといった問題があり、スムーズに活動ができなかったといった声が挙げられていました。それらの経験を活かして、問題に対する解決策や、円滑な活動を回すためのシステムに関するアイデアなどあれば伺いたいと思います。

垣野内くん：僕は医大病院内での業務補助をしていたのですが、振り返ると、特に最初の1日、2日はどこにも情報がきていない状態だったんです。こうした災害時には、はっきりした予定も立たないほどの状態になるんだということを僕たちは常に心構えておく必要があるんだと思いました。また、そうした状況下で、人を落ち着かせるのには、統率してくださる方を中心として動く態勢が必要だと思いました。例えば、今回の震災では大谷先生が早い時期に様々な情報を集約し、僕たちに活動事項を的確に指示して下さったので、僕たちも活動しやすかったですね。大谷先生が統率してくれる直前の状態というのは、多方面からの要望をなんでも受けるという形で活動しているような状態だったんです。

記者：大谷先生の情報の集約と指示が皆さんの活動をスムーズにしたんですね。

垣野内くん：そうですね。それと指示待ちという時間があります。こうした指示待ち時間でいちばん大事だったことは、緊急時に患者さんがどっと来た時に対処することでしたね。こうした時の対処が僕たち学生にいちばん求められていた働きだったので、その働きを維持し続けるというのが、けっこう難しいところでした。

植田さん：気を張り詰めながら待っていたので、すごく疲れるというか、大変でしたね。

震災を考慮して日頃から情報伝達手段を確保しておく

齋藤くん：震災時は電話が使えない中、インターネットは通じていましたよね。

垣野内くん：インターネットは福島大学経由のネットワークと当医大のネットワーク、特に、うちの大学は学年ごとにメーリングリストがあるんです。メーリングリストは個人の携帯電話に発信される形になっているので、うちの学年はそれで情報を流していました。



豊田くん：でもそれが思わぬ問題も生みました。情報を少しでも広めようとしてチェーンメールのようになってしまい、結果、様々な情報が錯綜してしまったようです。こうした情報の状態だったことから家で一人で過ごしていた人は不安にかられたりしたらいいですね。

記者：常に情報が配信されても、そういう弊害もできてしまうということですね。

豊田くん：そうした情報を吟味できるだけの冷静さがあれば良いですけど、そういう状況になると、どんな情報でも入ってきた情報に対して、いちいち反応してしまうんだと思います。でも、大学の様子を知ることができたということでは、メーリングリストで情報が一括で流れてきたので無駄を省くことはできました。たぶん学生はガソリンを消費して大学にわざわざ様子を見に来ることは避けられたと思います。

避難所の状況をすぐわかるように

豊田くん：物資の供給という点においてもリアルタイムに一括で情報がわかればよかったのかなと思います。例えば、学生としてボランティア活動をしている間に、僕らのところにも食料は配られたんですね。それはボランティアとしてもすごくありがたかったのですが、それが過剰になって食料が余ってしまったこともありました。また、各避難所では、現地に行って何が不足していて、何が過剰なのかを聞いてから、他の避難所に分配するという対応をしていました。インターネットを使って食料・物資・避難者情報の交換をうまくできたら、もうちょっとタイムリーな対応ができていたんじゃないかなと思いますね。

齋藤くん：情報が入ってこないために避難所を管理している人たちも明確なことがわからなかったり、県や市などによって違

う情報が錯綜したりしましたし。

豊田くん：インターネットがこれだけ普及しているから、今までは災害時でも情報伝達が割とスムーズにいくものだと思っていたんですが、結果はアナログな感じでした。

ボランティア活動をする上での情報共有

記者：こうした災害が起きた時に、もっとスムーズにボランティアの人が活動するための情報という観点からはどんなことが大切ですか？

荒井くん：僕らが避難所でボランティアを始めたのは4月2日頃でした。テレビなどでは避難所でのボランティアのことが放送されていて、それを偶然見て「じゃあ、やってみようか」ということでボランティアを開始しました。このように僕らは運よく、早く行動に移すことができましたが、他の学校ではスタートしたのが僕らのだいたい1ヶ月後くらいだったようです。もしインターネットなどを通じてボランティアのことなど明確に示されていれば、もうちょっと早い段階で動けたんじゃないのかなと思います。

鈴木さん：どこの避難所でどういったボランティアを必要としているのかといった情報やボランティアをしたいならどこに聞けばいいかなど、そういうことも何もわからない状態でした。実際、避難所に行って「こういうことは必要ですか」というように聞いて、それから許可をいただいて活動するという形でした。最近、授業で知ったのですが、保健所がいろいろな情報を把握していたそうでした。そうしたことが分かっていたら、上手に連絡をとってもっとアドバイスをいただけたのかもしれないなど今になると思います。避難所が全部閉鎖されてしまった今では、仮設住宅に対しても避難所で活動していたボランティア内容と同じようなことはできないかを保健所の方に相談しました。相談の結果、ここならできるんじゃないかというところを紹介してもらいました。

豊田くん：福島県外出身者の学生は、実家に一時避難していた人が多かったようです。そうした人の中には避難先で何かボランティア活動ができないかと考えたり、そうした情報を探していたりしていたのですが、なかなか情報が集まらなかったそうでした。これからはそういうみんなのためにも「今こんな活動をしていて、協力者を募集します」といった情報が受発信できるといいですね。実際、こうした情報の発信に僕はホームページを利用しました。僕は学内でホームページをもっているんですが、そのホームページの一部を利用して、僕たち学生がどんな活動をしているのかを発信したり、「ここではこういうボランティア活動があるようなので一緒に活動しませんか」と呼び掛けたりしていました。それを頼りに活動に参加した人もいましたし、逆に他の人がどんな活動をしているのかわかることもできましたね。



垣野内くん：ただ、そういう情報の集まるホームページが複数にあると、各ホームページに集まる情報が1件ずつなどの少数になってしまい、結局、そうした複数のホームページにアクセスしなければならないというような非効率性ができました。それでは意味がないのではと思いましたね。

荒井くん：それから、ネットだと情報が集まりすぎてしまう危険もあるので注意が必要だと思います。

災害ボランティアに備えてマニュアルを

齋藤くん：震災が起きれば、ボランティアは必ず必要なので、ボランティアを立ち上げた場合はそれに関連する情報を収集できるようなマニュアルみたいなものがあればよかったのではないかと思います。そうしたマニュアルが、大規模な施設などに予め設置されていればよかったのではないかと思います。

記者：マニュアルがあると動きやすいですね。

齋藤くん：みんな、最初から手探りでボランティア活動をしてきたので、マニュアルのようにまとめたものがあれば、どこでどうボランティア活動をやったらいいのか、対処しやすかったのではないかと思います。

今回のボランティアを通して学んだこと



垣野内くん

私の役割はほとんどが医大病院での連絡調整係だったので、裏方としての活動でした。そうした活動を通して感じたのですが、いろいろなところが共有している情報などをまとめて伝えたり、そうしたことに基づいて調整していくことの難しさを感じましたね。



豊田くん

避難所に避難している方々と接した時に、いろいろ不安やストレスを抱えている人達と関わる経験ができました。そうした経験によって、避難者の方々の言動や心理状況というものを身をもって体験したかなと思いました。また、水や物資が足りなくて本来の医療が行えないという状況になった時にどう対処できたらいいのかなど、そういうところまで想いが巡った体験でした。



齋藤くん

僕が行ったボランティアはすぐに人の役に立つようなボランティアだとは思わないですね。福島市内にあるいろいろな避難所をまわって、避難している人たちからいろいろ話を聞くという内容でした。60歳くらいのおばあちゃん、ストープの前でただ座って遠くを見ている人がいたんですよ。話しかけて会話を、「家は津波で流されたけど昨日孫が見つかった」と。それで「良かったですね」と言ったんですが、「今朝、火葬してきた」と仰ったんですね。もうその時点で僕の想像をはるかに超えた背景でした。被災地にはこれからずっと、家族や家を失うなど被災して心の傷を負っている人がたくさんいらっしゃると思うんですね。そういった患者さんと医療を介して出会うとき、その人の背景はどういったことなんだろうということをまず考えなければいけないということ、実際に自分が生半可に共感できないなということを考えました。これから医療を行っていく上で、できる限り、患者さんの背景を大切にしないといけないなと、自分の体験から思いました。



植田さん

私は、地震が起きて2日後くらいから医大病院で看護師さんのお手伝いや患者さんを運ぶような体力を必要とするお手伝いを中心してきました。医師の先生や看護師さんがほとんど家に帰らない状態なのに、自分はそういう限られたことしかできないので、今まで習ってきたことは何だったのかなと正直思うこともありまし

た。その半面、自分にもできることがあるんだと感じることもできました。できることを一つひとつ一生懸命やっていきたいと思えます。



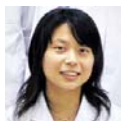
荒井くん

自分が今、最大限にできることはないかなと思って始めたのが、子供たちに学習を教えるボランティアでした。子供たちはとてもストレスフルで、どう接していいのか最初は全くわからなくて大変でした。そんな中でも、メンバー一人ひとりが子供たちの気持ちを考えながら接する中で、不安も解消できたことはとてもよかったです。自分たちのできることとしてベストを尽くせたかなと思いました。今回このボランティアをできたことは、僕たちにとってとてもよかったですし、避難している子供たちにも還元できたかなと思っています。でも、僕たちが辿り着けない領域、例えば、障害を持っている子たちに対して、僕たちは臨床心理士やカウンセラーではないので、うまく対処できなかったんですね。だから、もしまた活動をする時には、臨床心理士やカウンセラーとちょっと連携をとって、対処していきたいと思えます。



鈴木さん

私が行ったボランティアは、医療とは直接には関係ないことだったので、こういう震災が起きた時に自分が医学生であっても何もできないのが、とてももどかしいなと思ったんですね。多少の知識はあっても、実際に現地に行って医療活動をするのはどうしても資格が何もないのでできなくて。何か他のことをとって行動しました。私は子供相手のボランティア活動をしたんですが、子供の様子をいろいろ見た中で、彼らがストレスを感じているのはよくわかったんです。でも、実際に医療関係者につなぐといったところまではできませんでした。なので、もっと視野を広げてもっと広い活動ができればよかったかなと思いました。



高岡さん

私が行った活動は医療とは関係なくて、募金活動でした。実際は、医学生だからといって医療行為ができるわけではないので、もどかしい思いでいっぱいでした。でも、だからこそ、まわりの医学生たちとそんな想いを共有することができましたし、医学生じゃなくても、何かしたいという人たちと想いを共有して、一緒に呼び掛けて活動することができました。活動していく中で、ボランティアの存在があったからこそ、医療やその他のいろんなものがまわっているんだなということを感じることができました。たくさんの人に支えられているということもこれからもずっと忘れずにいきたいなと思えます。

医師の卵として福島県民のみなさんへメッセージ

福島で恩返しをしたいと思っています。特に福島県内では放射線の影響がかなり懸念されています。これから先、放射線の影響などを患者さんから尋ねられる機会はおそらく増えてきて、そのときにしっかりと対応できる医師になっていきたいです。また、体に入ってくるもののひとつとして放射線に注意が向けられていますが、まずは、体に入ってくる食べ物であったり、たばこやお酒にも気をつけたり、そういうところから自分の体や生活のことを見直すきっかけになるひとつの機会になればと思います。放射線の影響がありつつも、いかに健康に暮らしていけるかということを医師だけでなく、一人ひとりが気を遣ってあげたらと思います。そこから、健康な暮らしができるように福島県内から何か提案もできるんじゃないかなと思いますし、これから考えていきたいと思っています。



取材を終えて

今回直接お話を伺って、ボランティア活動をされている最中ではもとよりボランティアを始めるまでにおいても、様々な問題点や困難があったのだということ改めて実感しました。福島のために貢献したいという強い思いを持っているからこそ、自分が今できることを懸命に、自分自身や仲間を信じて活動をされたのです。この経験や反省から、今後もし災害が起きたときにこうしたい、こうしてほしいという明確なビジョンを持っています。福島にはこのような医学生がいるということを知りたく思います。災害ボランティアを経験したからこそ、多くのことを学び、それを活かして、これからの福島、ひいては日本の医療をしっかりと支えてくれるだろうということを確信しました。お忙しい中、取材を受けてくれた学生のみなさん本当にありがとうございました。

次回は、福島県立医科大学 医療人育成・支援センター 准教授 大谷 晃司 氏が学生災害ボランティア活動報告会で発表された「東日本大震災の福島県の医療や教育への影響」について詳しくご紹介します。